私のラグビー部生活

―昔を思い出すままに―

滝川忠夫（旧13回生 旧姓角掛）

昭和一三年四月、工業学校志望を断ち切られて失望のどん底に打ちひしがれていた私にとって、岩中の新しいペンキの匂いが、ツーンと胸を刺していた。卒業して来た厨川小学校（高等科）も新築したばかりだったのに、入学した岩中も、大沢川原から引っ越したばかりの新築で、制服もカバンも、すべてピカピカの一年生。

一度「落ちた」経験の私は、「糞ッ、負けるものか！」と必死に勉強した。「授業内容は、すべてその時間中に理解してしまおう」という意味込みで――。

一学期はアッという間に過ぎて夏休み、家でゴロゴロしていると、「用があるから学校に来い」と呼び出されて行ってみると、担任の北住先生が、

「君と〇〇君は、同じ点数で、通信簿はどっちも一番だが、君は遅刻が一回あるので〇〇君に負けた。（奨学金〈授業料免除〉は受けられない）」

ということだった。

しかし、私は二学期以後もしっかり勉強した。教室の座席は点数の良い者から順番に後ろの方から席をきめられた。〇君は、甲組の、私は乙組の、最後部の第一席だった。

二年生の春頃だったと思う。

「君、ラグビー部に入れ、今日放課後、校庭に出ていろ」

と、上級生に言われて出ていると、

「馬鹿ッ、はだしになれ、制服も脱いで」

と怒鳴られた。

ほとんど外で動いたことのない私の、足も腕も白くて、女の体のようで恥ずかしかった。練習が終わって体を洗って階段を上るのが苦しかった。翌日その痛みは、ますますひどくなって、階段は四つん這いで上った。

同じ二年生の中で、私の他二三人の者が指名されて、選手（補欠）にさせられた。

それから、私の岩中ラグビー部生活が始まった。へとへとになるまで練習させられた。一六〇糎の私の体は当時一番大きく、フォワードをさせられた。ボール・インを一〇〇本続けてやらされ、ブレーキで顔を上げると世の中が違って見えた。

毎日の練習の疲れで、勉強は時間が足りなくなって、成績も下がった。それでも、最低でも、座席は最後列のどこかにはおられた。

三、四年になると、もう岩中ラグビー部の中堅となり、最高学年になると、

「岩中の名誉を両肩に担って」

という気魄を持つようになって頑張った。

いつも山中先生が見ていてくれた。医専グラウンドと言って、当時上田の専売局、盛岡工業学校の裏で練習していると、山中先生は、自転車でグラウンドの端で見ていてくれた。

仙台遠征の時も、山中先生の引率で旅館に泊まって、秋田工業や仙工、栃木中などと試合をした。秋田工業とは、前半勝っていたが（記憶が正しければ）後半では負けた。なにしろ黄金時代と言われた頃だったので、惜しみないラグビー人生だった。

岩中を卒業しても、どこへも行く当てもなく困っていたら、山中先生から、

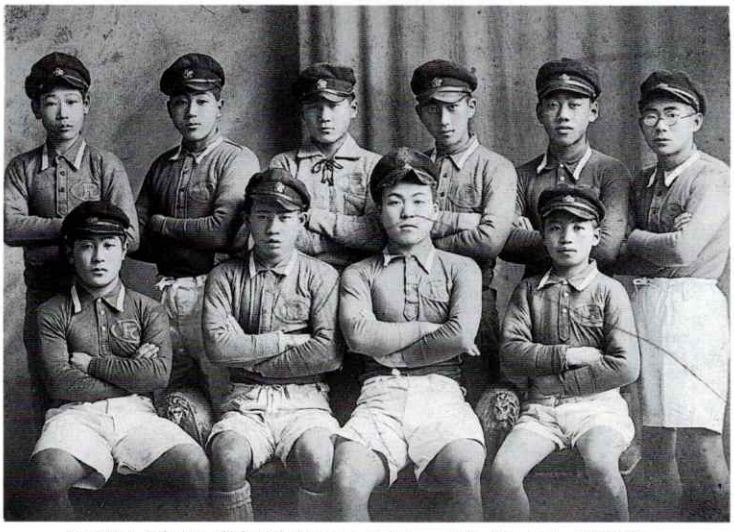
「ケーオーに行かないか？」

と言われて入ったのが、慶応（特選生）だ。運が良かった。何もいらない。夜具だけ持って来ればよい、学費も食費も小遣いもすべて支給ッ。

昭和二四年三月慶応卒業。岩手中・高校の教師として、盛岡に帰って来た。山中先生には勿論、遠藤先生、日野岳先生には、先輩としても、さんざんお世話になりました。

その後、再び東京に出て来て教員…。三五年在職後、停年退職したのが昭和五九年三月。埼玉の田舎に引込んだきりになってから、もう一二年。皆さん、お世話になりました。

人生これですべて感謝!!



昭和14、5年頃、学年だけのユニフォームを作って、得意顔。
襟の３本白線は、女学生のまね！

練習の途中の中休み
（上田の医専グランドで昭和16年頃）

軍装の勇姿